

2023年度博物館実習報告

朝 田 葵¹⁾, 加 守 田 優²⁾, 川 本 愛 華³⁾, 桑 原 朋 樹⁴⁾, 田 中 星 音⁵⁾,
渡 部 義 弥⁶⁾

概 要

大阪市立科学館では、例年、博物館学芸員の有資格者になるのに必要な博物館実習を実施し、各大学から実習生を受け入れている。2023 年も 9 月 14 日～21 日に 5 名の学生を受け入れ、実習を行った。ここ数年は新型コロナウイルスまん延防止のためにひかえていたギャラリートークを、感染症が 5 類指定になったことから再開した。本稿では、実習の概要について指導を行った渡部が述べ、それぞれの実習生の実習を通じての体験や考察を、原稿ママにて報告する。

1. はじめに

大阪市立科学館では、例年、博物館学芸員の有資格者になるのに必要な大学単位になる博物館実習を実施し、各大学から実習生を受け入れている。

実習については、昭和26年の博物館法制定を受けた翌27年の博物館法施行規則制定当初から博物館実習3単位が必修とされ、平成8年の改正により、博物館実習の一層効果的な実施を図るため、大学における博物館実習に係る事前及び事後の指導の1単位を含む3単位が必修となっている。(文部科学省2024、博物館実習ガイドラインより)

実習は大学及び大学附属博物館で行うものと、博物館園で行う館園実習に分かれる。大阪市立科学館で行うものは後者となる。実習内容については博物館実務を実地体験するものとなるが、文部科学省の博物館実習ガイドラインには、次のように記載されている。

⑦ 実習内容

◆ 講義形式のみならず、博物館の現場で博物館の活動を体験するとともに、今後の展示や活動等を実際に企画・立案する際の参考となるよう、その館園で実現可能な活動を自ら企画・立案することができるように留意する。

◆ 受け入れる博物館の理念や地域貢献に関わることを、事業の背景として伝えるような内容が望ましい。

◆ 具体的には、次のような内容が考えられ、実務を体験することにより、学芸員の業務を中心に博物館の業務の多様性を認識する。

i 学芸業務の実際(展示作業、資料整理、教育普及事業の実施、調査の実施、広報活動等の業務を補助する。)

ii 資料の受け入れから展示活用まで(業務の流れに即して、具体的な実務を体験する。)

iii 館の施設設備と学芸業務以外の実務(受付、監視、保守点検、博物館ボランティアが行っている活動等を体験する。)

これら内容については、ガイドラインでは、最大で 15 名程度までで行うことが望ましいとされ、また事前に内容についてインターネットなどで告知して募集することとされている。また、大学担当と連携をとりながらともされている。

人数と告知は、当然必要なこととしてこれまで行ってきたが、大学担当との連携については、大学がわの努力のみによっていたことがあるので、今回ガイドラインを読み直し、その精神にしたがって今後修正していくべきと考えている。

さて、このようなことで、大阪市立科学館では、そこまで広汎な実習は行えないので、プラネタリウムやサイエンスショーを学芸員が行っている大阪市立科学館の

*1) 神戸大学 2) 京都教育大学 3) 高知大学 4) 関西学院大学 5) 琉球大学 6) 大阪市立科学館
watanabe@sci-museum.jp

特徴である対面の学習活動として、ギャラリートークを行ってもらうことにしている。その他に座学なども行ったが、多くの時間をギャラリートークに費やした。本稿では5名の実習生それぞれがどのような取り組みを行い、またその結果としてどのような考えを持ったかを、それぞれの考えにおいて記載することで、実習の一環とした。また、生のデータでもあるので(不規則な用語使用などについてのみ補正している)今後の実習にも役に立つと思われる。以下、原則原文ママにて掲載する。(ここまで、実習指導学芸員 渡部義弥記載)

22 実習生 朝田葵の報告

2-1. 実習の概要

2-1-1. 内容

本実習では以下の活動を通して、学芸員という仕事を体験し、科学館の学芸員に求められるものについて考えた。

- ・施設見学(バックヤード、展示場、プラネタリウム)
- ・教育普及活動の見学(サイエンスショー、ジュニア科学クラブ)
- ・市民参画活動の見学(友の会)
- ・ギャラリートーク(課題)

2-1-2. 目標

私が本実習に参加するにあたって実施前に掲げた目標は以下の2つである。

- ・学芸員が身につけるべき知識や能力は何か具体的に現場から学ぶ
- ・自分の理想の学芸員像を持つ

大学の座学で学ぶ博物館学は美術館の学芸員の目線からのものが多かった。学芸員としての根本は変わらないとしても、科学館の学芸員の仕事を内側から見ることができる機会は貴重なため、現場に立ったからこそわかることを吸収したいと思って臨んだ。また、それによってまだ自分の中で曖昧な自然科学系学芸員のビジョンを明確にし、自分ならこんな学芸員になりたいという理想像を描けるようになることを目指した。

2-2. 実習課題: ギャラリートーク

「任意の展示について来館者に見方、使い方、その価値(面白さ・意義)を伝える」

2-2-1. 担当展示

私がギャラリートークの課題で自分の担当として選んだ展示は4階展示室入口付近の隕石展示である。この展示コーナーでは、ハンズオン展示2点を含む実物資料18点を中心に、断面の観察ができる体験展示や落下時の実際の映像を取り入れつつ隕石の概説がされている。

2-2-2. 選定理由

- ・自身の大学での専攻に近く関心が強い資料である
- ・来館者があまり足を止めない展示である

以上が数多くの展示資料の中から私が隕石展示を選んだ理由である。自分が解説するからこそ来館者に新たな発見を持ち帰ってもらえる展示は何かと考えていたときに、隕石は展示場入口横という位置にもかかわらず、近くの体験展示に負けてしまい、素通りされることが多いことに気づいた。そして、自分が好きな隕石であれば、馴染みのない方々にも、大学で学んだことを活かして魅力を伝えることができるのではないかと同時に、より多くの来館者に隕石を見てもらいたいと感じたので、一般に馴染みがない展示を取り上げることへの不安は少しあったが挑戦することにした。

2-2-3. 実施

2日目から最終日まで展示の前で展示解説を行った。実際に解説に立ってみると、何を話すか、どこまで専門的な話に踏み込むかといった内容面はもちろん、まずどう声掛けをするか、どれくらいの長さなら迷惑に感じられないかといった点にも難しさを感じた。実際に来館者の方々と会話をしてみると、自分がおもしろいと思って話したことがあまりみなさんの興味を惹かなかったり、逆にこちらが聞かれると思ってもみななかった質問が飛んできたりと、ギャラリートークの実践でしか味わえない驚きを体験できた。この経験では知識面と伝え方の技術面でそれぞれ学びがあった。知識面では隕石で言えば、でき方や内部構造、分類といった資料に関する学術的知識だけでなく、展示の隕石が落ちてきた時はどんな時代だったかという学際的な知識や、隕石落下時のクレーター形成の有無とサイズ感、周囲に及ぼした影響や市場価値、身近な活用例、回収にまつわる裏話といった小話もあった方がいいことがわかった。技術面では様々な年齢層・興味を持つ方が来館する中で、各人に合わせたアプローチが必要になることを実感した。ギャラリートークをする上で1番難しいと感じたのがこの部分で、ボランティアガイドの方や学芸員から頂いたアドバイスを参考にさせていただきつつ、幼いお子さんには鉄隕石を触ってもらいながら磁石を用いて鉄でできていることを体感していただいたり、小学生のお子さんには大きさの説明をするときに学校のプールなど身近なものと比較したり、馴染みがない人にもとつきにくくならないようにクイズやイラストを用意したり、毎日工夫できることを探して試行錯誤を繰り返していた。最終日の発表では10数名が解説を待つという雰囲気だったので、展示全体に触れるレクチャー式で行ったが、実際は展示を見ている方に1組ずつ声をかけて、話していく中でその人が興味を持っていることから話を広げていくことがほとんどだった。レクチャー式は

学術的内容を確実に伝えることができるが硬くなりがちで、マンツーマンはその人に合わせたオーダーメイド解説ができるが学術的な話が不十分になることもままあるので、どちらが良いのか最後まで結論が出なかった。

2-3. 実習全体を通して考えたこと

最後に私が本実習での経験と当初の目標を照らし合わせて考えたことを述べる。まず、学芸員には専門知識だけにとどまらない学際的観点が必要だと実感した。実際にギャラリートークを行い、その展示から科学と私たちが生きる世界との繋がりを意識できる解説をしたい、するべきだと強く感じた。また、学芸員には話を聞く能力が必要だと思った。ギャラリートークはあくまで対話で、解説を押し付けるのではなく、相手が発言しやすい雰囲気を作り、その発言を拾うことが重要だと思う。今回、私は来館者の方と話す中で改善のための多くのヒントをいただき、私自身の資料に対する理解も深めることができた。これは学芸員として働いても変わらないことだと思う。本実習を終えて今私が思う理想の学芸員像は、「来館者と一緒に科学を楽しみながら新たな知見やそのおもしろさを伝え、彼らの知的好奇心をくすぐることができる人」である。ここで綴ったことはこの博物館実習に参加しなければ思い至らなかったことだろう。本実習を経て学芸員という職業を現実味を持って捉えることができたと思う。

3. 実習生 加守田優の報告

3-1. はじめに

私自身は普段、大阪市立科学館において、学芸補助スタッフとして主にプラネタリウム投影を担当させていただいているが、今回博物館実習においては、展示品解説に挑戦した。また、それと共に普段見ることのないバックヤード、そこでの業務内容等に触れる機会を得た。以下にその内容や感想等を報告する。

3-2. 見学や講義

副館長による講義や、各種展示品の解説、バックヤード見学等、受動的な学びを以下にまとめた。

これまでの大学での講義から、展示品の選択や配置、というものには必ず館や、展示担当者の意図がある、と指導を受けてきたが、改めて科学館の展示品や逆に展示されていない(されなくなった)資料を見学させていただく中で、展示品の選択、配置、キャプション等どのように説明を加えるか、これらが館内のふと通り過ぎてしまうような一角の品であれ、全ての資料について考えつくされているという事実に改めて驚きと、学芸員の仕事のやりがい、そしてその仕事ぶりに気付いてもらうことの難しさを感じた。

3-3. 展示品解説

本実習では、その多くの時間を展示室に立ち、各自が決めた資料について、来館者の方々に説明を行うという課題が与えられた。私は4階の「パラボラゴルフ」及びその周辺の展示を選択することにした。この展示品は、天体観測において、様々な波長による観測方法を示すエリアの一角にあり、特にパラボラアンテナの仕組み、電波望遠鏡の仕組みへとつながる展示と解釈した。そこで、当初は来館者様にパラボラゴルフを体験していただき、その後、「このようにして、光や電波を集めることができます。これがパラボラアンテナの仕組みなのです。」といった形で、以降の展示に向かっていただいていた。しかしながら、来館者様との会話の中で、そもそもパラボラアンテナが何のために存在するのか、何の装置なのか知られていないという事実を痛感させられた。そこで、最終的には、隣の展示品である、波長の観測結果を示した画像や、実物のパラボラアンテナの展示を含めた、エリア全体の解説を行うことにした。解説を行う中で、生の人間が、生の人間に対して解説を行うことの意味や意義を考えさせられ続けた。私がその展示品のそばで解説を行うことで、例えば解説パネルや、あらかじめ収録された音声などの解説と比べ、来館者様に何を提供できるのか、ということだ。

1 つは、来館者様の属性に合わせた解説が可能である、という点だろう。大阪市立科学館は小学生の団体、家族連れ、カップル、老夫婦、様々な属性を持つお客様がいらっしゃっている。その中で画一的な解説ではなく、それぞれの属性や興味、これまでの経験に合わせた解説が可能であると感じた。例えば「放物線」を示す際、中学生や高校生に $y=x^2$ の数式を示せば、「ああ、アレか」と(多くの場合は少し苦い顔をする)身近に感じるようだ。一方で「テレビの受信機」の利用例は、ある程度の年齢層でないとピンと来なかったりするようだ。と、世代や興味の方向性によって話題を変化させる面白さと、様々な話題や知識をストックしておかなければならない難しさを感じる課題であった。

また、他の実習生の展示品解説を聞く中で、それぞれの得意分野に合わせた様々な話題の出し方や、お客様へのアプローチの仕方等、学ぶところが多かったと感じている。この場を借りて他の実習生にも感謝を述べたい。

3-4. 最後に

およそ1週間の実習期間で、ようやく 1 つの展示についての話題や理解を何とか深めることができたと感じている。しかし、科学館にはほかにも様々な展示が存在する。改めて学芸員に求められる知識・経験の多彩さ深さを感じるとともに、実践の中で、お客様と会話を重ねながら、改めて、学芸員として科学の楽しさを伝えていきたいとの思いを強くした。

4. 実習生 川本愛華の報告

4-1. 実習内容

実習は7日間あり、展示物、バックヤード、プラネタリウム、ジュニア科学クラブなどの見学と、実習全体を通しての課題であるギャラリートークを行った。ギャラリートークは実際に来館者に対して行い、最終日には複数の学芸員の方々に評価していただいた。

初日に、科学館の学芸員に求められるものは何かという問いを提示され、課題を行いながら答えを考えた。ほかの博物館施設と異なる来館者の特性について、現場ならではの体験を通して学んだ。

4-2. 講話、見学

初日は副館長による講話があり、博物館施設と特に科学館に求められるもの、大阪市立科学館の指針についてお話していただいた。最初にも触れたが、ここで提示された問いは実習中に常に考えており、ギャラリートークでは来館者それぞれの事情を理解することや伝え方のヒントにもなった。

展示物の見学をし、来館者の考えに合わせながら伝えることの難しさをよく理解した。順路は、見る側が疑問を浮かべ、その答えが続くような順番で並べっており、興味を引き理解を助けるように作られていた。しかし、展示物の豊富さが故に、それに沿って進まないこともあった。特に、左右それぞれに展示物があると、興味がある側のみ通る人も少なくない。

ハンズオン展示は特に目を引いており、来館者は楽しみながらわかりやすく学ぶことができていた。しかし、展示物が壊れやすい、触るだけになっているといったデメリットもあった。

床の素材による毛羽立ち、壁の色による靴汚れの目立ちなど、学びに直接かかわる部分以外でも工夫があった。

地域との関わりである友の会、ジュニア科学クラブの見学も行った。科学に興味がある人の集まりであるため、一般の来館者とは話し方が異なった。

プラネタリウムやサイエンスショーは、相手が聞く姿勢にあるが、興味や集中力が様々な人々に対して、同一の内容で楽しませる必要がある。個人を見て内容を変えることができない、大勢を相手にする難しさがあった。

4-3. ギャラリートーク

初回は、実習グループのみで行い、お互いに良い点や改善点を伝えた。私は、声が小さい、専門用語が多い、展示内容を紹介するだけであり会話ではなく発表になっている、複数人を相手にしているが全員に話が届いていないといった指摘をいただいた。背景や関連する内容、実用例に対する理解と知識の不足が問題点だった。

毎日、全体での振り返りを行ったほか、昼休憩、ギャラリートーク実施中に実習生同士で適宜意見交換をした。実習担当以外の学芸員の方が様子を見に来てくださりアドバイスをいただくこともあった。

意見交換で頻繁にあがった点は、話しかけるタイミングと、話す長さである。来館者同士で話していたり、解説文を集中して読んでいたりすると、こちらの話が邪魔になることもある。また、来館者はそれぞれの事情があり、滞在時間が異なる。ひと通り話しているとかなりの時間を要するが、短すぎると内容として不十分である。初回到話の組み立て方が悪くゴールが見えていないという指摘もあり、これらの点とともに考えていくつかの流れを試した。結果として、短い話をいくつか用意すること、相手の反応を見て言葉を使い分けたり、どこまで話を広げるか決めたりすることが効果的であった。これを通して、会話であることも強く意識することができ、発表と言われた状態から改善することができた。

学芸員、実習生からいただいたアドバイスで、実用性の部分を説明したほうが良いという点が共通していた。話の流れを考えて最後にしていたが、すべて聞いてもらうことは難しかった。私はこの課題の対象として、宇宙線を選んでいたので、来館者の多くには馴染みがなかった。そのため、宇宙線や展示してある観測装置の話が多くなってしまったが、それだけでは具体的なイメージが浮かべてもらうことが難しかった。興味をもってもらうため、導入に使うことも試してみるべきだった。

また、ボランティアのサイエンスガイドの方々が行う様子を見学したり、お話を伺ったりすることもあった。楽しそうに話す方が多く、来館者は聞く姿勢に入りやすいようだった。

4-4. まとめ

実習全体を通して行ったギャラリートークでは、展示対象の深い理解に加えて、他分野に繋げることができる知識の広さが必要であることと、それを相手に合わせて伝える話し方や引き出しの多さが重要であることを学んだ。また、友の会やサイエンスショーなども含めて、来館者とのコミュニケーションの場が多く、その技術が極めて大切であることがわかった。

また、受動的な学びの場である博物館から、来館後の能動的な学びに繋げることも必要である。何かを知ってもらうことに意識が向いていたが、学び方もその1つであり、それを伝えることも重要な役割である。

実習を通して、博物館、特に科学館に対する認識を改めるとともに、資料の管理や活用、人が居て伝えることの必要性をより理解することができた。

5. 実習生 桑原朋樹の報告

5-1. 実習内容

1. 実際に働いている学芸員の見学(サイエンスショー、友の会など)
2. 展示を一つ選び、その展示についてのギャラリートーク

以上二つのことについての感じたこと、工夫したことなどを下記にまとめる。

5-2. 実際に働いている学芸員の見学

この実習期間の初日から数日は、学芸員が来館者に対して、どのように接しているのかを見学し、言葉づかいや体の向きなどを観察した。全体的に共通する特徴は、来館者に二択や三択の選択問題を出したりしながら、身近な例を出して興味をひき、わかりやすい言葉を使い、冗談を交えながら、楽しく理解しやすいように科学を説明していた。

特に、子供たちを対象にしたサイエンスショーやジュニア科学クラブでは、このアプローチが強調される傾向があった。

一方で、父母の会などの成人向けのプログラムでは、専門知識を前提とした表現を用いていた。

以上のことから来館者に合わせて接客方法を調整し、親やすさと理解を促進するために手法を変えていることがわかった。これにより、来館者は学芸員の説明に集中し、より効果的に情報を吸収することができると感じた。

5-3. ギャラリートーク

ギャラリートークをする展示に私は、2F にある「どれがはやいかな」を選んだ。この展示は、三つのボールが同時にスタートし、レールの上を転がり、どれが一番速くゴールするかを体験させる展示である。しかし、実際展示してある装置は、スタートする時に、真ん中のボールだけ遅れてスタートしてしまうので、正確に実演できない状況だった。最初のギャラリートークは、実習生メンバーと実習担当者の前で行う予定であったが、偶然その場にいた来館者も加わり、一緒にギャラリートークを行うことになった。最初のギャラリートークでは、この同時にスタートできないという状況を把握していなかった。その上、言葉選びが悪かったり、声が小さくなったり、話の途中で詰まってしまうたり、周りを見ていなかったりと改善すべき点が多くあった。だが、その時は運が良く、来館者が会話をしてくださる方だったのでなんとか話を進めることができた。

その後、子供たち(主に幼稚園児や小学生低学年)を相手にギャラリートークを行う際には、初めは説明していたが、理解が難しいようだったので、「どれが一番はやいと思うか」という問いかけをし、子供自身に体験

させ、自分の意見を述べさせるように促した。すると、考えて意見を言う子供もいたが、一部の子供は転がすことに夢中になってしまい、説明する声が聞こえていないような場面が度々あった。他の実習生に相談すると「無理に話しかけない方がいい」という助言を受け、取り入れてみた。そうすると、その場の雰囲気は、壊れなかったが、問題点は、子供の独占状態に陥り、他の来館者が違う展示に移動してしまったことである。

また、大人や中学生以上の来館者には、展示の同時にスタートできていない理由や、本来その展示の科学的原理について説明を行った。まず「どれが一番はやいかな」という問いかけを含め正解を提示し、実用例などを交え、詳しく説明した。しかしながら、来館者の関心を引くための工夫や、より分かりやすい言葉の選択ができていないと感じた。

この経験を通じて、子供と大人の来館者それぞれに合った適切なギャラリートークをする難しさがわかった。今後は、より興味を引く会話スタイルやわかりやすい言葉づかいを学ぶ必要があると考える。また、来館者の満足度を考慮しながら、個々のニーズに適切に対応する方法を探していきたいと考える。

5-4. 発表

最終日に、数人の学芸員の前で同じ展示についてギャラリートークをした。その時、またいくつかの反省点が出てきた。私はわかりやすくするために、言葉を選んでいるつもりだったが、説明が不足していたり、誤解を招いたりしてしまっていた。なので、来館者の理解を促進するために、シンプルで明確な表現を心がけ、より丁寧な言葉を日頃から話すようにして行く必要があると感じた。

その一方で、「数回体験した後説明するのはとても良い」や「実験がうまくいかないことに対してきちんと向かい合っている」、「わかりやすい言葉を選んでいる」との評価をいただいた。このことを生かし、改善点を修正していきたい。

5-5. まとめ

この実習を通じて、色々な年齢の来館者に対して説明を行う難しさや、展示の内容をより深く理解してもらうために、同時にスタートできていない事実を説明し、本来一番はやくゴールする理由や実用例など最後まで説明する難しさを感じた。

特に、子供たちに科学的な概念や原理を説明する際に、彼らの知識レベルと興味を引く方法を見つけることがとても難しかった。同時に、展示の不具合について説明するだけではなく、なぜ一番はやく着くのか、その科学的な根拠に基づいた実用例を示すことが、子供たちにとって重要であることがわかった。

この実習を通じて、子供から大人まで幅広い層の

人々と対話し、相手の反応や理解度を適切に判断することの難しさを痛感した。これらの課題に対処するために、時間をかけて多くの来館者とコミュニケーションを取り、さまざまな年齢層の人々と対話する機会を持つことが重要であると考えた。私自身、他人とのコミュニケーションが得意ではないが、これは、私の成長に不可欠な経験であると感じた。

今後も、説明力を向上させるための訓練や、異なる年齢層に対する対話スキルの向上、来館者により有益な知識や体験を提供できるように努力していきたい。

6. 実習生 田中星音の報告

6-1. はじめに

今回、大阪市立科学館で7日間の実習を行わせていただいた。初めに実習生についての他己紹介、副館長からの講話、展示見学があり、日を分けてジュニア科学クラブ・友の会・サイエンスショーの見学、バックヤード見学を行った。全体課題として一つの展示物を実際に来客者に解説する「ギャラリートーク」を行った。最終日に学芸員の方々に選んだ展示物についての解説をした。

この7日間を通しての感想や反省を以下に述べる。

6-2. 選んだ展示物について

私がギャラリートークに選んだ展示物は「ラジオゾンデによる高層気象観測」である。選んだ理由としては自身の専門分野であり、なおかつ実際に大学の研究としてこれを使用したことがあったため、実体験も交えながら話せるとお客様の興味を引くことができるのではないかと考え選んだ。

実際に展示物の前に立ってみると順路とは少し外れた企画展と同じ場所にあるためか、見向きもせずに他の展示物の方へ行く方が多く、さらに他の展示物に比べて触れるようなものでも、動かせるようなものでもないため、解説することさえできないという時間が多くあった。そのため、「一組一組のお客様を大事にする」ということを意識して、お客様がどういう知識や情報を持っているのかを聞き出しながら相手に寄り添った解説をするようにした。後は質問には全て答えるようにし、周りの気象に関する展示物の知識も増やすことでもっと話を聞きたいと思ってもらえるような工夫をした。

6-3. 発表

最終日の発表では、発表した後に展示物担当の学芸員の方からフィードバックがあった。地上天気図と高層天気図を用意したが、大勢の前ですることをあまり想定しておらず図が小さかったため、後ろの人にも見えるように工夫をするべきという意見があった。狭い分野で学芸員の方でも詳しい知識を持っている人もいない状況だったため、解説している内容が本当に正しい

ものなのか責任感を持つべきだと思った。後は基本的に知識がそこまでないことを前提に話していたため、誰に対してもそのまま使えるような解説をしていたという風に自分では振り返るが、もっと利用者が参加できるような解説の仕方をできるとより良い解説になったと考える。

6-4. 最後に

私はアルバイトで接客業をしていたためお客様の前に立つことや話をするのは慣れているため、ギャラリートークはとても楽しく行うことができた。しかし、普段はマニュアルなど話す内容は決まっているため接客の仕方を工夫することはあったが、素材だけ与えられて話すことを自分で決める経験は乏しく、内容に関して非常に悩んだ。利用者の質問にも答えられるようにしようとしたが、なかなか情報を集めるのにも苦労した。その時に一緒に観測を行った同級生や院生の先輩に話を聞くなど、身近な人を頼って正しい情報を得られるともっと自信をもって話をできたと思った。これから、卒業論文や社会人になってからも人前で話す機会はあるため、その時には今回意識したこと、学んだことを大事にしながらか改善していきたい。

参考文献

- [1]文化庁、2024年、「博物館実習ガイドライン」2024年6月版、
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/pdf/94071001_02.pdf、
2025年2月6日閲覧